選外佳作の六

ふしぎな卵

K・S

ある山のふもとに、一軒の小さなお家があつて、元氣でやさしいおぢいさんと、可愛らしい女の子が住んでゐました。

女の子のお名前は、みいちやん。よくおぢいさんのお手傳ひが出來ました。お庭もはきますし、おぢいさんが畠からとつて來たお大根を洗ふことも出來ました。

ある日、おぢいさんは、町へ買物に出て、おとなしくお留守居をしてゐるみいちやんにまつかなビロードの足袋を買ひました。もうそろ〳〵寒くなる時で、お庭に白い霜がおりる朝もありましたから、みいちやんのあんよも冷たかつたでせう。赤いたあたが、みいちやんのあんよをあつたかくする樣に。それはほんとによいお土産でした。

みいちやんは喜んでその足袋をはいて遊びました。お使ひにもはいて行きました。

ある暖かい、お天氣のよい日に、みいちやんはその赤い足袋を、お洗濯しました。そして、おひさまのよくあたるお窓の外に下げて干しました。一日中、おひさまは、赤い足袋をあたゝめました。そしてその晩、一匹の雀がその赤いたびの中に巣をこしらへてしまひました。

次の朝、みいちやんが足袋をはかうとしてお窓の處へ取りに來ますと、片方の足袋の中に何か這入つてゐる樣です。

「オヤ？」「チュッチュッチュッ」

「ナンデセウ」「チュッチュッチュッ」

お窓にのつて、ずつと背のびをして中をのぞきました。

「まあ雀さんよ」「卵を生んだのね可愛い可愛い卵」

「おぢいさん！　おぢいさん！　私の赤いたあたが、雀さんのお家になつてしまひましたよ」

みいちやんは、足袋をそのまゝそつとして置くことにしました。その朝も霜がおりて、寒かつたのですけれど、足がつめたいのなど我慢して居樣とみいちやんは思ひました。そして、それから毎日、みいちやんは、お米を持つて行つては中に入れてやりました。雀は元氣になり、みいちやんはすつかり雀と仲よしになりました。

ある朝、いつもの樣に、お米を持つて行つて、赤い足袋の中をのぞきますと、いつの間にサ

ヨナラしてしまつたのでせう、雀の姿が見えません。そして卵が二つと、何かお手紙が這入つてゐました。そのお手紙には、こんなことが書いてありました。

ミイチヤン、アリガトウ。オレイニコノタマゴ　ヲ　アゲマス。コノタマゴヲタベテ、ホツペタ　ヲ　ミッツ　オタタキナサイ。ドコヘデモ、スキナトコロヘトンデユケマス。ミイチヤンノ　イチバンダイジナ　イチバンスキナモノ　ガ　ミツカルマデ　トキドキ　タマゴヲ　アゲマス。

それで、みいちやんは、その朝、早速卵を一つ御飯にかけて食べました。あの雀さんの處へ行つて見たいなと思ひながら、とても美味し卵いでした。あゝそう〳〵頬を三つ叩くのでしたね。みいちやんがその通りしますと、みいちやんのおからだが急にすうつと輕くなりました。そしてフワ〳〵〳〵とお空の方へ飛び出しました。飛行機よりも、飛行船よりも、氣持よく、愉快な樣に思はれました。と急に下の方が賑やかになりました。

ホーホケキヨ　ピーチクピーチク

チュツチュツチュツ　テツペンカケタカ　テツペンカケタカ　ボッボッボ

みいちやんは小鳥の國へ來たのでした。そこには、この間の雀もゐて、大喜びで色々美味しい山の果物や木の實の御馳走をしてくれたり、小鳥の合唱やおどりを見せてくれたりしました。

あまり面白くて、お家へ歸るのも忘れてしまひました。

おぢいさんは、みいちやんが、何時迄も歸つて來ませんので少し心配になりました。

私もひとつ行つて見ませう。と殘つてゐたひとつの卵を食べました。けれどもおぢいさんは頰ぺたを叩くのを忘れましたのでちつとも飛べません。ピョン〳〵と自分でとび上つて見ますけれど駄目です。仕方がないので、お馬に乘つて行くことにしました。

おぢいさんは、大切にして置いた鈴をふたつお馬の頸につけて、チリンチリン　バカツ　バカツ　チリンチリン　バカツバカツ　とお山へ出掛けて參りました。みいちやんは、この鈴が大好きでしたので、直ぐにこの音を聞きつけて、おぢいさんがお迎へに來たことを知りました。

おぢいさんも小鳥の國で面白く遊びました。歸りには、みいちやんも、おぢいさんも、お馬も卵を食べました。頰ぺたを三つたゝくのを忘れませんでしたから、みんなフワ〳〵とお空を飛んで、直ぐにお家へ歸ることが出來ました。

次の日　又足袋の中に卵がひとつ這入つてゐました。みいちやんは、お菓子の國へ行つて見たいな、と思ひながら食べました。ほつぺたを三つたゝきました。

フワ〳〵〳〵昨日より少し長くとびました。まあ、まあ、今度はお菓子の國へ來ました。お家も、木も、草も、みんなみんなお菓子、きれいな女の人が立つてゐて、お籠にいつぱいお菓

子を入れたのをみいちやんに下さいました。

次の日は、玩具の國へさんで行つたり、ゑ本の國へ飛んで行つたりしました。

でも、お菓子よりも、おもちやよりも、何よりもみいちやんの大好きな大切なものがありました。

「お父さまとお母さまの處へ行きたいな」と思つて食べた卵は、今迄で一番おいしい味がしました。そしてみいちやんのお身は、空の上へ高く〳〵とびあがりました。

フワフワフワ。まあよい香ひがしますこと。一面の花園、そして、きれいなきれいな音樂、お話に聞いた神樣のお國に來たのでせうかしら。

そこで、みいちやんは、とう〳〵お父樣とお母樣にお會ひしました。

大好きな大好きなお父樣。

大事な大事なお母樣。

おぢいさんも、きつと卵をたべて、あとからさんでいらつしやるでせう。今度は頰を三つ叩くのを忘れないで！。

（をはり）